

表

症 例	PCR-SSCP				dideoxy 法	塩基変異		アミノ酸変換
	E5	E6	E7	E8		codon	nt	
若年	Z1	+	-	-	-	+	140 ACC→ATC	Thr→Ile
	Z2	-	-	-	-			
	Z3	+	-	-	-	+	156 CG del	stop codon (21 codon 下流)
	Z4	-	-	-	-			
	Z5	-	-	-	-			
	Z6	-	±	-	-	ND		
成人	Z7	-	-	-	±	ND		
	Z8	+	-	-	-	+	140 ACC→ATC	Thr→Ile
	Z9	-	±	-	-	ND		

+: 移動度の変化又は変異が確認されたもの, ±: 移動度の変化又は変異が推定されたもの,
-: 移動度の変化が認められなかったもの, ND: 検索中

〔解 答〕

張 淑靖 (新大脳研神病) PCR-SSCP 法で陰性となった例の中にもこの方法で検出できない変異がある可能性が残されています。これはパラフィン切片を用いたためというよりも、変異の種類、部位および組織中の変異細胞の密度によるものと考えています。

〔質 問〕

中村 正 (群大脳外) p53 の変異の頻度はどのくらいか、又良性、悪性との相関は？

〔解 答〕

古閑比佐志 (新大脳研神病) 文献的には30%程度、自験例においても約1/3に p53 の変異が関与していると考えられる。癌化の initiation 又は progression いずれに関与するかは現時点の症例数では、明らかにすることはできないが、colon cancer などとは異なり比較的早期から関与していると思われる。(自験 astrocytoma 2/4 に mutation を認めている。)

3. 松果体細胞腫の2生検例

佐土根 朗*, 中里 洋一*, 鎌田 一**

武田利兵衛***, 中村順一***

*群馬大学医学部第一病理

**北斗病院

***中村記念病院

症例：いずれも67歳女性であり類似の臨床経過を辿った。軽度の意識障害で発症，眼球運動を含め神経学的に異常を認めず。両症例とも松果体部腫瘍と診断，occipital transtentorial approach にて全摘した。

病理学的所見：症例1：細胞密度の高い腫瘍で，狭い弱好酸性胞体と繊細な突起を持ち，類円形ないし楕円形のほぼ均一な核を持つ細胞が，び漫性に，一部は胞巣状

に増殖していた。小葉構造は不完全であり，明らかな rosette の形成は認められなかった。血管結合織に富む部分では，胞体内に暗褐色の顆粒を含む大型円形細胞を認めた。組織壊死を認めず，核分裂像も少なかった。免疫組織化学的に腫瘍細胞は，NSE (+)，synaptophysin (+)，NF68KD (+)，NF160KD (+)，chromogranin-A (+)，S-100 (-)，GFAP (-) であった。暗褐色顆粒

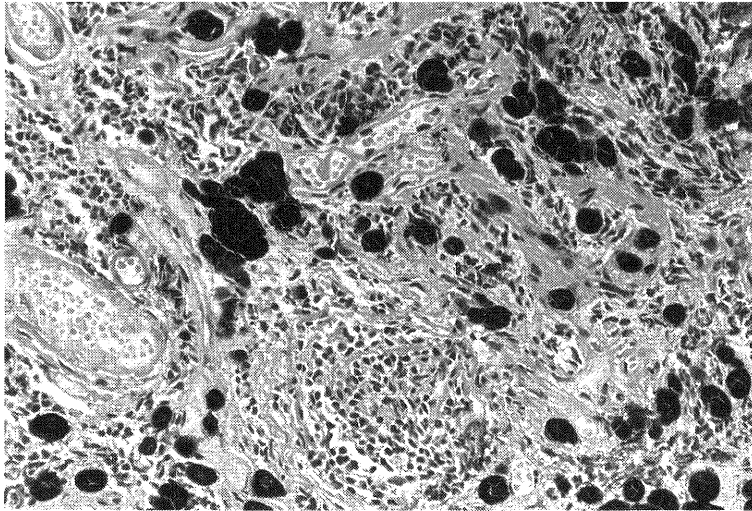


図 1 小型異型細胞が胞巣状に増殖しており、血管結合織内又はその近傍に、メラニン含有細胞が認められる。HE×200

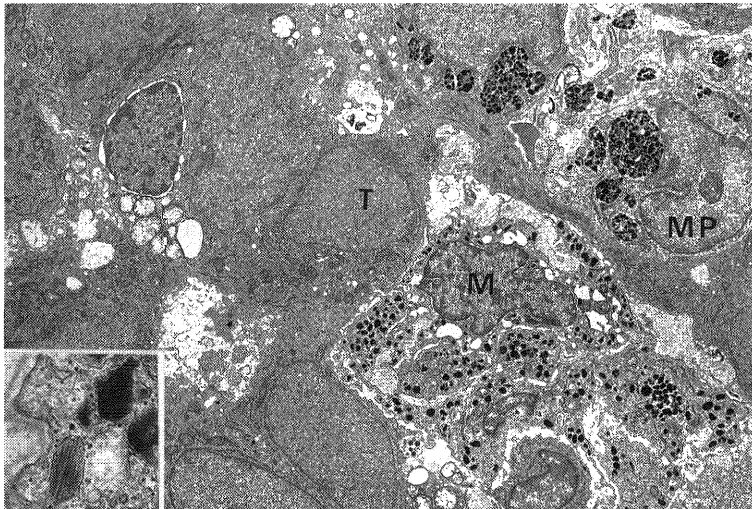


図 2 発達した細胞突起を有し、basal lamina で包まれたメラニン含有細胞 (M) と melanophage (MP). 腫瘍細胞 (T) には annulate lamellae が認められる。×1,500, 挿入部: 横紋構造を有する premelanosome (stage II) ×25,000

は Masson-Fontana 染色で陽性、漂白後の同染色で陰性であり、メラニン顆粒と考えられた。電顕所見上、腫瘍細胞は細胞内小器官に富んでおり、dense-cored vesicles, annulate lamellae も散見され、一部では少数の melanosome も認められた。一方、basal lamina で包まれ、

胞体内および突起に多数の free melanosome を有する細胞が、主に血管周囲に認められた。症例2: 暗褐色顆粒含有細胞を欠く点以外は、症例1とほぼ類似の光顕ならびに免疫染色所見である。超微構造上も dense-cored vesicles や annulate lamellae が少ない以外、類似性

の強い腫瘍であった。

考察：① 両症例とも松果体固有細胞との類似性が強く、松果体固有の分化を良く保持しており pineocytoma に属する腫瘍と考えられた。② メラニン含有細胞は超微形態上、腫瘍細胞との類似点を有しており、相互の移行形も存在し、腫瘍細胞内にも melanosome が認められた。従って、松果体実質細胞の本来持つメラニン産生能が、一部の腫瘍細胞に強調されて現れたものと考えられた。③ 腫瘍細胞は免疫染色にて chromogranin-A 陽

性であった。

〔附 議〕

中島 孝(群大第二病理) 光顕像を見ると melanophage が集簇していると思えたが、電顕像では確かにメラニン産生細胞の集簇が存在する。従ってメラニン顆粒の見られない腫瘍細胞に電顕的にプレメラノゾームが存在するか否かが、細胞分化を考える上で重要と思う。

4. 松果体部腫瘍の治療、消失後11年を経た症例の脊髄に発生した neurogenic tumor の生検例

伊藤 拓緯*, 高橋 均*, 生田 房弘*
佐藤 浩**

*新潟大学脳研究所実験神経病理

**山形県立中央病院整形外科

症例：57歳，男性。1977年，頭痛，嘔気が出現，CTで松果体部腫瘍と水頭症が発見された。北海道大学脳神経外科にて45Gyの放射線療法とV-P shuntが行われ，画像上腫瘍は消失した。生検は行われていない。9

年後の1986年左下肢痛出現。1988年，山形県立中央病院整形外科でT10レベルに腫瘍が発見され，腫瘍全摘後に50Gyの放射線照射を受け，経過は良好であった。さらに4年後の1992年に，歩行困難と両下肢しび

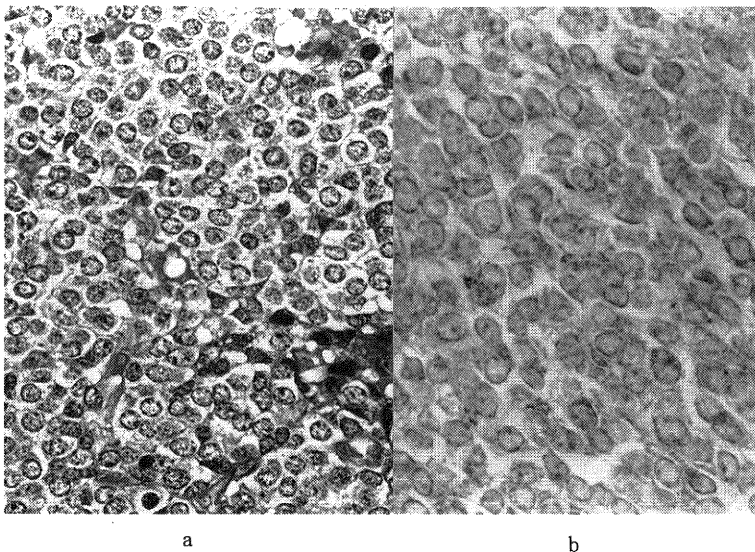


図1 a) 腫瘍は均一な小型類円形細胞より成る (HE×132)
b) 腫瘍細胞胞体に synaptic vesicle-specific protein が陽性 (×200)